

年間第22主日

イエス、死と復活を予告する

マタイ福音書 16章 21-27

(そのとき、) イエスは、御自分が必ずエルサレムに行つて、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」イエスは振り向いてペトロに言われた。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」それから、弟子たちに言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである。

<説教>

毎度の事とはいえ、きょうのテキストも短いけれど盛りだくさんです。いのちのことばを説くイエスはほんとうにすごいお方だとあらためて感じます。

1. 受難と復活の予告
2. ペトロ、イエスをいさめる
3. イエス、ペトロを叱る
4. 自分の十字架
5. 自分の命

この5つの内容がわかりやすい言葉でかつ深い意味をこめて語られます。

1. <受難と復活の予告>

イエスは実際そういう目にあっただから、イエスが亡くなった後に、福音書を書いた人たち、あるいは後に残った人たちが、イエスはこういうことを前から言っておられたという風に書いたのだろう、という人たちがいます。いわゆる事後預言です。事が起こってから、起きる前に言ったように書いたわけです。でもこれは必ずしもそうではないでしょう。

実際、イエスのような神の子、愛の人がでてくるということは、「長老、祭司長、律法学者たち」つまり当時の実力者たちが「うつろ」つまり中身がからっぽだった、というはつきりとしたしるし（証拠）になるわけです。

イエスをつぶしちゃえ、やっつけてしまえ、それが実力者、権力者のやり口だったということはイエスはさんざん経験してきました。これからはもっとひどくなるだろう、ということはイエスには分かるわけです。だから、殺されて三日目に復活するとイエスは言われたのです。

2. <ペトロ、イエスをいさめる>

すると、ペトロはイエスに褒められたばかり（16:13-20）なのに、イエスをわきの方につれて行って「そんなメチャをいわないでくれ」なんていいただきます。もっとわたしたちに教えてくれ、わざわざ殺されに行かないで欲しい、エルサレムなんて行くなということです。

3. <イエス、ペトロを叱る>

イエスはペトロにわきに連れられて、ゴニョゴニョ言っているのをそっぽを向いて聞いていたのでしょうか「振り向いて」ペトロを叱責します。

サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。（23節）

ペトロは血肉によらず、イエスの愛、イエスの言葉、イエスの業は神さまから出ているということ身にしみて分かっていました。でも、イエスの姿が消えてしまえばお仕舞いだ、なんとかイエスを自分の手元においておきたい、そういう血肉のほうにペトロの心が動いたということです。それに対してイ

イエスが、サタンしりぞけ、と言ったというのです。

4. <自分の十字架>

自分の十字架を背負え、これは、わたしが私自身の十字架を背負うように、おまえたちもおまえたち自身の、各自の十字架を背負え、それではじめてわたしについて来られる、ということです。イエスについて行くということは、現れてきたイエスの姿につかまって、すがりついて、それで生きていくということではない。それでは本当に生きることにはならないということです。そうではない、わたしに従うということは自分の十字架を背負って来なさいということです。自分の十字架？きびしい言い方に聞こえますが、そうではないのです。

ペトロは「**あなたはメシア、生ける神の子です**」と告白し、イエスに「**シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ**」と褒められました。でもペトロはその舌の根の乾かないうちに「**サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者**」とイエスに叱られます。

ところで、長老、祭司長、律法学者たちとはいったい悪人でしょうか？もともとはモーセの教え＝律法を守り、それぞれの立場から真剣にユダヤの伝統を守ろうとしている人たちです。律法社会を守り発展させるために実力者となり、権力者として世を統治している人たちです。言い換えれば、善きこと、善き世界、善の番人です。

しかし、イエスという神の子、愛の人が世にでてきた。預言者以上のお方が実際目の前にいる。ペトロはその教え聞き、その業を見て、信仰告白をしました。しかし、血肉に支配されイエスに叱責されました。さがれサタン、と。ここでイエスは悪の誘惑のことをいっています。イエスにはペトロが誘惑に負けて、迫害者である長老、祭司長、律法学者たちと同じ姿になってしまうことを「**あなたはわたしの邪魔をする者**」と叱っているのです。

わたしたちも同じです。いったんはイエスのことがわかるのです。ペトロの

ようにあなたは神の子とイエスを告白することができます。しかし、そこにはイエスにすがろうという誘惑があります。イエスにすがろう、イエスの十字架に。イエスさまどうかわたしの元からはなれないで…

5. <自分の命>

イエスを引き止めて、イエスにつかまって、イエスの十字架を盾にとって、そして自分の命を救おうと思う、そういう者は自分の命を失う、とイエスは言います。それは、たとえ信仰によってでも自分の生命で自分を救おうと思う者はそれを失う、ということです。殉教ということで自分が生きようということになると、それもまた自分の決心や度胸で自分の命を立てようということになります。イエスはそれでは自分を失うよ、と言います。たたみ掛けてイエスは言います。

人はたとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。(26節)

これはこうも言い換えできます。

人はたとえ(全)教会を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。

ここでいう命とは生存の命、生きている命のことをさしているのではなく、聖霊によって生きている命のことです。

どうぞ、きょうのテキストからイエスの福音を聞いてください。わたしたちが、自分が自分でない者に自分の生命の根っこ、根元があるということ。自分の内部から自分というものを保つのではないことを、イエスのことばをとおして聞き分けることができますように。
